

努力した日々は 今でも大切な宝

(埼玉県川越市)

ヒーハイト精工株式会社
常務取締役 兼 PMO

福留 弘人 (48歳)



福留弘人さんは1967年、愛知県弥富市に生まれました。小さい頃から自動車のレースが好きで、親戚に鈴鹿サーキットなどに連れていってもらうのをとても楽しみにしていた。

自動車やレースが好きだという思いを、成長しても変わらず持ち続け、名城大学の理工学部に進学し、交通機械学科で内燃機関の研究に取り組んだ。エンジンの研究の中で、トライボロジーという言葉を知ることになった。

そして担当教授に某エンジン部品メーカーを紹介され、「この仕事ならば研究を活かせる」と判断した福留さんは、同社に入社した。

「入社当時は、PVDやDLCなどいろいろな被膜が出てきていた頃でした。会社も被膜の開発に力を入れるということで、私も材料・表面処理の開発の担当になりました。PVD開発の全盛期で分からないことがたくさんありましたが、面白かったですね」。来る日も来る日もサンプルを作成しては、摩耗試験を行う日々が5年ほど続いた。試験片を磨きすぎて指に血豆を作りながらも、作業を続けた。新たな技術がたくさん生まれていたPVDコーティング被膜の開発

の中で、「その当時の理論上ではできないとされていたことに対しても、“自分はこういうものを作りたいんだ”との強い思いで、自分なりに形にしていこうと、仕事をしてきました」と語る。

その後は、自動車メーカーの専用仕様の設計を10年担当。そうした中で福留さんは、子どもの頃から好きだったレースに関わる仕事をしたいという思いが強くなっていった。「思い切って、自分のやりたいことをやってみようと思ったんです」という福留さんは、2006年に独立し、レース用自動車の部品開発を請け負うコンサルタント業務を始めた。

◎ 転がりとの出会い

独立してコンサルタントを行った会社の一つに、ヒーハイト精工があった。「ヒーハイト精工もレース用部品をやっていて、私は技術顧問として関わっていました」。同社の技術開発だけでなく、品質保証などについても、改革を進めていった。しかし2008年頃からリーマンショックなど



リニアブッシュ「UTB」は、近年の新製品開発で生まれたものの一つ



ルーアメーカーとのコラボ製品

の影響もあって、レース部品の需要は減っていき、福留さんも何をしようか、と思案した。同社からは、「正式に当社に入社してほしい」と声をかけられていたが、すぐには応じられない事情があった。

ヒーハイト精工の主力製品は、転がり運動をするリニアモーション機器だ。一方、それまで福留さんがエンジン部品メーカーにいたときから携わっていたのは、滑りの技術だった。「実績を積んでからこの話を受けよう」と決め、転がりの技術や会社経営などを学んだ後、2012年について正式に入社した。

「いろいろ勉強していく中で転がりの中に滑りの要素があることが分かったんです。慣性力などでボールにも滑りが起きるし、ボールが追従しないことで、スカuffingやアブレーション摩耗が発生しますよね」。若い頃に摩耗試験に明け暮れて蓄積した「材料・表面処理」のノウハウを活かせることを実感した。

◎ 若い時の経験が活きた

また、若い人材が増えた同社の開発陣の指導役も担う福



留さんは、「若い時のたくさん吸収できる期間に、何をしても何を見たかが大事」だと言う。実際に、かつて福留さんが摺動テストを行うために、試料片を磨いたことが役に立った。試験のために試料片の表面をきれいにする目的で水に溶いたアルミナやオイルに溶いたダイヤモンドで磨き続けていると、次第に「これとこれの相性が良いな」といったことが分かるようになった。そして、次第に摩耗テストをしなくても、その結果がイメージできるようになった。「表面を磨くことは、きれいな摩耗面を作るのと同じことなんです。これをできるようにしてくれたエンジン部品メーカーにも感謝しています」。

現在同社は、新製品開発に力を入れており、福留さんはその開発を牽引する立場にある。福留さんの指導のもとで利便性などに着目したリニアブッシュなどを次々と開発しているところだ。そうした中で工業以外の分野にも採用が広がり、メガバス社と共同開発したフィッシングのルーアには、可動式の錘として、同社のリニアブッシュが採用された。それを手に取る福留さんの顔に笑みがこぼれた。



共同開発のルーアを手にする

ふくとめ ひろと 福留 弘人氏

1967年、愛知県生まれ。海、山へドライブ、また、林道の散策など、仕事から離れて、ほっとリラックスした時にひらめくことがあるという。